

シンポジウム「環境倫理学 × 事例に基づく研究」

司会：神崎宣次（南山大学）

提題者：藤木篤（久留米工業高等専門学校）

紀平知樹（兵庫医科大学）

丸山徳次（龍谷大学）

今年度のシンポジウムでは環境倫理学における事例に基づく研究をテーマとして、検討したい。もちろん、倫理「学」のシンポジウムであるので、個別の事例に関連する具体的な倫理問題のみに注目するのではなく、事例に基づく研究が倫理学に何をもたらしうるかという方法論の水準での議論にも時間を割きたい。これはまた、環境社会学などの隣接領域との差異、環境倫理学という分野の存在意義を問うということでもある。

環境倫理学において事例に基づく研究の可能性を検討する価値が高いと企画者が考える理由を列挙すると、以下ようになる。

- 1) 1980年代後半に登場してきた環境プラグマティズムは、自然の価値論などの抽象的かつ普遍的な議論に没頭してきた従来の環境倫理学が現実の環境問題の解決には貢献しなかったと主張した。この主張がどれほど妥当なものであったかは分析を要するとしても、少なくとも一部の環境プラグマティストや環境倫理学者は、実際に現実の環境問題へのコミットメントを行なうようになった。こうした動向の意義は評価されるべきであるだろう。しかしながら、行われた活動に対する倫理学の観点からの検討は十分に行われてきたとはいえない。
- 2) 持続可能性研究においては、(自然)環境だけでなく、そこにに関わり、生活を営んでいる人々やその生活という側面の重要性が認識されるようになってきている。それにとともに、それぞれの地域の環境が多様であるというだけでなく、それぞれの地域で人々が置かれている文脈や条件もまた多様であるということも認識されてきている。こうした認識に基づくならば、各地域で生じている環境関連の問題は（ひとまずは）それぞれ固有の問題としてとらえられ、個別的に検討されるべきということになるだろう。
- 3) さらにいえば、科学と社会との関係についての近年有力な考え方、すなわち社会に貢献する科学という考え方に基づけば、環境問題に関わるような研究においては、地域のステークホルダーこそが問題解決の主体となるべきであって、そもそも解決すべき問題の設定もステークホルダーと研究者による「共創」によってなされるべきだとされるだろう¹。このような研究から環境倫理学が何を学ぶうるかを考えた場合、個別の事例に基づいた環境倫理学の研究の必要性は明白だろう。
- 4) 日本における公害をはじめとする環境破壊と健康被害をもたらした事件は、現在にも未解決の影響を残しているにもかかわらず、また未来における再発の可能性を否定しきれないにもかかわらず、過去の出来事にされてしまうかもしれない。この点で、欧州環境

¹ 神崎と紀平が参加していた、総合地球環境学研究所「地域環境知」プロジェクト (<http://ilekcrp.org>) などを参照のこと。

庁が2001年と2013年の二度にわたって公表した予防原則に関する報告書が過去の事例の報告と検討に基づいたものであることが思い起こされるべきだろう。未来のために我々が学ぶべき最も重要なリソースは過去の事例なのである。

- 5) 環境倫理学の教科書等でもあまり言及されないが、リチャード・ラウトリー（後にシルヴァン）とヴァル・ラウトリー（後にプラムウッド）は、当時のオーストラリアにおける森林政策に対する批判という具体的な問題から環境問題にコミットし、この問題についての著作 *The Fight for the Forests* を第三版までアップデートした。環境倫理学者は最初期から事例に基づく研究を行ってきたのである。

本シンポジウムでは、環境倫理学を取り巻く以上のような事情を念頭に置いた上で、では事例に基づいた研究から環境倫理学、あるいは倫理学全般が何を学ぶうかを検討する。我々が当日行う検討のための材料となる「事例」として、以下の三名のスピーカーにそれぞれの研究について話していただく。

まず藤木篤氏に「筑後川流域における日本住血吸虫病問題」研究について語っていただく。この研究は地域の環境問題と人々の健康問題が交錯する領域を扱った、日本における環境倫理学では数少ない研究である。また藤木氏は神戸大学大学院人文学研究科倫理創成プロジェクトで行われてきたアスベスト問題の聞き取り調査などにも参加されており、討論においてはこれらの話題にも触れていただく機会があるかもしれない。

次に提題者でもある紀平が環境問題における価値の問題を論じる。環境問題においては、様々な価値の対立がある。それは経済成長 vs 環境保護といった古典的な対立であるかもしれないし、環境保護を目指す中での価値の対立かもしれない。そうした対立を調停するような仕方で環境問題を解消することが望ましい。そうした「事例」のひとつとして、豊岡市でのコウノトリの野生復帰の取り組みを取り上げ、その事例が単なる個別事例なのか、それともある種の普遍的な事例と見なすことができるのかを考えたい。

最後に丸山徳次氏に、長年行ってこられた水俣病研究について論じていただく。この報告では、環境正義、世代間倫理、予防といった、環境倫理学全般にとって重要だがそれ自体としては抽象的な概念が、具体的な事件の中でどのような形で倫理問題として現れてくるのかという一例が示されるだろう。

以上の三つの報告に基づいて神崎が簡潔に論点を整理した上で、全体討論を行う。おそらく重要な論点の一つは、研究者としてのコミットメントの問題になるだろう。持続可能性に関わる事例へのコミットメントは、それ自体持続的なものとならざるをえない。関心を持ち続けること、関わり続けることが、研究者倫理の一部として要求されるのではないだろうか。

もちろん、当日は以上で述べたような企画者の問題意識に限定されず、参加者からの幅広い関心を拾い上げることを目指す。多くの会員に参加をお願いしたい。